

海浜レジャーとメディア・スポーツ・イベントに関する スポーツ史的一考察

—— メディア・スポーツ・イベントが果たした役割をめぐって ——

松浪 稔^{*1}

A Sport Historical Study on Media Sport Event and Seaside Leisure

by

Minoru MATSUNAMI

Abstract

This study focuses on two Media Sport Events: the “Ten Miles Swimming Race in Osaka Bay” which was sponsored by the OSAKA MAINICHI NEWSPAPERS in 1905 and the “Physical Education Encouragement Swimming Meet” which was sponsored by the Hochi Shimbun in 1908. This study seeks to clarify the purpose, establish the actual situations and describe the function of these sport events. This study concluded that the purpose of these Media Sport Events was to enlighten the public about Maritime ideology. The newspaper’s participation as sponsors was a way to help improve their circulation.

At that time, sea bathing was seen as salubrious – one way to cure sickness and improve health, similar to visiting a hot-spring spa to bring about general good effects. In addition, such sea bathing was one of the available summer leisure opportunities. But in the 1900s, after two big overseas wars, the Enlightenment of Maritime ideology connected sea bathing with swimming as healthful activity.

The two Media Sport Events functioned to promote swimming in the sea. This outcome followed the National policy to enlighten Maritime ideology. The Media Sport Events mediated Enlightenment of Maritime ideology, with bathing and swimming together as media. So the Media Sport Events represent signal opportunities to help create seaside leisure in Japan.

I はじめに

『レジャー白書2009』¹⁾によると、平成20年度の

海水浴の参加人口は1,890万人。国民一人当たり
が海水浴にかかる平均費用は20,200円であり、約
3,817億円が消費された。海水浴はわが国を代表

* 1 東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

するスポーツ・レジャーの一つとってよいだろう。

いっぽう、現代社会において、スポーツとメディアが密接な関係にあることは周知の事実である。そこで本稿では、海水浴をはじめとした海浜レジャー²⁾と、メディア・スポーツ・イベント³⁾の関係についてスポーツ史の視点から考察することを目的とする。本稿においては明治38(1905)年に大阪湾内で開催されたわが国最初の水泳のメディア・スポーツ・イベントである大阪毎日新聞社主催「海上十^{マイル} 競泳」と、明治41(1908)年に隅田川で開催された報知社主催「体育奨励水泳大競争会」に着目し、その実態と影響を明らかにすることを試みたい。

II 海水浴と水泳

1 海水浴のはじまり

一般に海水浴といえば、浜辺で泳ぐことをイメージするのではないだろうか。しかし、日本最初の海水浴場は水泳とは無縁のものであった。そもそもわが国には「潮湯治」と呼ばれる海水に浴して療養する習慣が古くからあった。明治14(1881)年、『内務省衛生局雑誌』第三十四号の「海水浴説」という論文で「海水浴」という言葉がはじめて使用された⁴⁾が、これは、温泉で「湯治」をするように病気の治療を目的に海水に浴することを指していた。

わが国最初の海水浴場は、陸軍軍医總監松本良順が明治18(1885)年神奈川県大磯に開設した海水浴場である。松本は、海水浴は病気の療養と健康を増進させる効果があると説いた。海中で強い波に打たれることで身体を丈夫にするのである。そのため岩肌の露出した磯が海水浴場として最適だとした。このような海水浴の効用は、雑誌記事を通して一般にもひろがった。たとえば「海水浴は古来神経強壯浴と称し、浴後は神思爽快となり、寒冷、塩分、波浪の合同刺激により、皮膚の末梢神経作用奮興し、皮表の血管収縮し、血液を内部に送入し筋肉収縮し、且つ皮膚の^あ汚^か垢を去る等、^{すべ}凡て血液の運行を盛にし、新陳代謝機能を活潑ならしむ、海水浴は学生諸氏に至極的^(ママ)当のものなり」⁵⁾と伝える記事等が掲載された。

こうして海水浴の効用がひろまり、海水浴がブームとなって、各地に海水浴場が開設された。もちろん海水浴ブームには人々を海水浴場へと運ぶ鉄道網の発達が必要であった。

また、海水浴は避暑とも関係が深い。関東ではお雇い外国人等が鎌倉周辺を避暑、避寒のため保養地としていた。明治12(1879)年7月6日の『ベルツの日記』には「七里浜と称せられる海岸地帯の、片瀬に接する部分は、これ(海水浴)におあつらえ向きである」⁶⁾とある。そして明治22(1889)年横須賀線が開通し、交通の便が良くなったことで、より多くの保養客が鎌倉周辺を訪れることになった。

このように医療法、健康法としての海水浴は、同時に避暑や余暇の娯楽、保養(レジャー)⁷⁾として受け入れられたのである。

2 武芸としての水泳

水泳の技術は、わが国においては古来武芸として研究された。いわゆる日本泳法である。武芸としての泳法は戦場で要求されるものであり、水を支配し、無駄な体力を使わず水中を移動したり、水中から周囲に注意を払ったりする技術が重視された。水術という教習体系を整えた流派として確立されたのは江戸時代初期である。勅日本水泳連盟によれば、現在も12の流派が伝わっている。

明治維新に伴う幕藩体制の廃止とともに、江戸時代の水術は一時衰退することになった。しかし明治6年頃から隅田川浜町河岸等で水練場が再開された。武士の特殊技能だった水術が、武士階級の崩壊によって、練習料を支払えばだれでも指導を受けることができる水術となったのである。家禄を失った武士の糊口をしのぐ手段でもあった。毎年夏になると各派の水練場が隅田川の河岸に現れたという⁸⁾。明治33年頃には、東京には7流派17の水練教習所があったようである⁹⁾。

III 水泳のメディア・スポーツ・イベント

1 明治期のメディア・スポーツ・イベント

近代的な日刊新聞の創刊は明治初期であり、その頃からスポーツに関する記事が新聞紙上に掲載されていた。スポーツに関する記事は当初より新

聞を構成するコンテンツだったのである。日清戦争が勃発すると、新聞は戦況をいち早く報道することで飛躍的に部数を伸ばした¹⁰⁾。

明治30年代に入ると、日清戦争の報道で拡大した部数を維持する為に、新聞社がイベントを開催するようになった¹¹⁾。このようなメディアが主催するイベントのなかにスポーツ・イベントもあった。

わが国最初のメディア・スポーツ・イベントは、明治34（1901）年11月時事新報社が主催した「十二時間の長距離競走」である。これは12時間ひたすら上野不忍池を周回し、70マイルの歩行を目指すものだった。このイベントに刺激を受けた大阪毎日新聞社は同年12月「長距離競走大会」を開催した。このイベントは8時間以内に50マイルを走破することを目標とした大会であった。これらのイベントの目的は、新聞紙上では「体育奨励」と謳われていた。しかし、これらのイベントに関する記事が連日新聞紙上に掲載され、読者の人気を演出、動員することで、新聞の部数維持、販路の拡大が目指されたのである。

このような長距離競走に続くメディア・スポーツ・イベントが「海上十^{マイル}湊競泳」と「体育奨励水泳大競争会」であった。以下に、これらのイベントの実態を新聞記事から明らかにしたい。

2 大阪毎日新聞社主催「海上十^{マイル}湊競泳」

明治38（1905）年7月25日『大阪毎日新聞』（以下『大毎』とする）紙上第一面に「海上十湊競泳」開催の告知が掲載された。以下のとおりである。

由来我邦は海上国として国民皆海上上の思想に富むを以て知らる。日露戦を開始するや我が海軍は連戦連捷遂に露国海軍を殲滅し、ここに遺憾なく海国男児の本領を発揮して列強を後へに墮若たらしむるに至れり。而してこれ一に我邦民が海事思想に富むの賜なるを知らば、今後ますます海と親しみ海上を踏破する事、毫も陸行と異ならざるの思想を養成するの必要燎として明かならん。我社海上十湊の競泳は実にこの意に出づるものにして、堂々たる戦捷国民の競技として蓋しこの右に出づるものなきは我社の信じて疑はざるところなり¹²⁾。

つまり、このイベントは日本海海戦等の日露戦での勝利を背景に、「海国日本」の国民として、競泳を行うことによる海事思想の養成を趣旨とした。海事思想とは、海に関する思想である。四周を海で囲まれた日本が近代国家として発展していくためには、海に関する思想、たとえば水泳、操船術、港湾、軍艦について等、海に関する事柄の知識、技術が必要であるという考え方である¹³⁾。

期日は8月20日。場所は大坂築港（天保山沖）から御影魚崎（住吉川河口付近。現在の六甲アイランドへの入り口付近）間の十湊。参加資格は満20歳以上40歳以下で、海上長距離水泳の経歴と技量があること。応募者の中から体格検査と実地試験に合格した者を選手として選抜するとした。第一着には金300円と特製金メダル他、成績優秀者には賞品が授与されることになった。

『大毎』は競泳大会開催まで連日関連記事を掲載し、様々な情報を読者に提供した。大会の水路や潮流、役員、審判員、医師、審判規則、賞品、競泳者心得、観覧者への注意、識者による談話、選手の申込状況などである。選手の申込みがあれば「選手候補者」として出身地、年齢、職業、経歴、流派などを紹介した。選手申込者の流派や腕前が紙上で紹介されることで、個人対個人という興味に加え、「流派対流派」、いわば長距離遠泳の他流試合の様相を呈することになったのである¹⁴⁾。さらに外国人の申し込みもあり、日本泳法と外国人の泳法との比較という興味も加わった¹⁵⁾。海事思想の養成を目的とする競泳であるが、そこに「流派対流派」の戦いというわかりやすい対立の「物語」を挿入することで、読者の関心を集めたのである。

申込者は100名を超え、選手候補者として95名がまず発表された。そして体格試験に合格した68名が実地試験に挑んだ。実地試験は大坂中之嶋一周（実際はほぼ半周）。中之嶋公会堂（現在の大阪中央公会堂付近）前の土佐堀川を出発し、土佐堀川を下って、堂嶋川を田蓑橋付近までさかのぼるコースで行われた。結果28名が十湊競泳当日の選手として選抜された。

実地試験当日は会場となった中之嶋が人で埋まったといわれるくらい大勢の見物客が押し寄せた

という。

大会当日の海上には浮標によって水路が明示された。そして各選手に番号と符号をつけ、それを紙上で発表し、その符号の旗を標識とした船を各選手に随行させた。『大毎』紙上では二面余にわたり決勝点の設備、選手姓名、選手の符号、観覧の位置、水路の図面など観覧に便利な情報を掲載した。陸上から観戦しても、水路や各選手の位置が一目瞭然となるようにしたのである。

阪神電鉄と高野鉄道（現在の南海電鉄）は、観覧者のために臨時列車を増便するなど便宜を図った。観覧のための臨時的観覧船も多数出帆した。

長時間の遠泳となるため、選手は競泳の途中で付添いの船から食料を海中に投げ入れてもらったり、保温のため身体中に油を塗ったりして完泳のための工夫をした。

『大毎』は大会翌日も二面を使って大会の実況を報道した。優勝者は東京帝国大学法科学士の杉村陽太郎¹⁶⁾。大阪築港一魚崎間を6時間8分で泳いだ。悪天候の中、28名中7名が完泳という結果だった。決勝点の魚崎の浜には10万人以上の観客が集まったという。

そして『大毎』は大会終了後に、「わが社海事思想養成を標榜して企てたる十湊競泳、一昨日多大の成^(マツ)効をもつて終了を告げぬ、選手二十八名の技倆は遺憾なく発揮されたり、幾十万の観覧者、海に陸に極まりなき感興を味^{あじは}へり、世人 悉く水泳を起因として最も痛切に海の趣味を悟れり。換言すれば健全なる海事思想ここに一般の頭脳に深く刻まれたるなり。真に海国民の祝すべき次第ならずや」¹⁷⁾という記事を掲載し、このイベントの趣旨であった海事思想の養成が達成されたと伝えたのである。

また、優勝した杉村陽太郎は競泳前に「徹頭徹尾水府流の泳法のみを用ひ観海以下関西派のものと競ふて何れが果して競泳に堪ゆるかを試みん覚悟なり」と述べていた¹⁸⁾。そして大会後「優勝選手の流名」という記事では、完泳した7名の流派（水府流、能嶋流、小堀流、神伝流）が紹介された。「諸氏の到着の先後によつてその流儀の優劣を定むるは元より失当の事に相違なきも、兎に角これまで急泳に長じ遠泳に適せずとの評ありし水

府流が却て遠泳に於ても他流を押し得るの能あるを示し、次では能嶋、小堀の各流、能く関西派の代表として充分の価あるを証しぬ」¹⁹⁾というように、水府流には負けたが、他の関西の流派も実力に遜色はないことを伝えた。こうして「流派対流派」という読者の関心を集めた「物語」も大団円のうちに終了し、このイベントは成功裏に幕を閉じたのである。

3 報知社主催「体育奨励水泳大競争会」

『報知新聞』は、「海上十湊競泳」の三年後、明治41（1908）年8月3日、紙上にて「体育奨励水泳大競争会」の開催を告示した。以下のとおりである。

体育奨励水泳大競争会

本社は体育奨励の目的を以て昨年夏期九段招魂社境内に於て全国素人相撲大会を開催し、予期以上の好果を収めれば、今回更らに其目的を継承して全国水泳大競争会を催さんとす。蓋し水泳は古来我国に於ける武芸十八般の一に算^{かぞ}へられ、士道の振作、体育の養成に資する所多大なりしは世人の周知する所、又以て本社の素志に添ふ可きを信ずればなり。斯道の士願はくは奮つて参会せられんことを切望す。

参会規定は左の如し。

競泳申込者は十七歳以上四十歳以下とす。

一、競泳志望者は八月十一日迄に本社に申込まる可し。

二、申込者は八月十二日午前十時迄に本社に参集、体格検査を受く可し。

三、八月十三、十四両日に競泳予選競泳を執行す。

四、予選競泳当日には午前十一時迄に吾妻橋側に参集すべし。

五、合格者全部を五組に分ち各組より優勝者三名宛^ツを選び都合十五名を大選手とす。

六、大選手は付添人同道八月十六日午前十一時迄に千住の大橋に参集すべし。

七、大選手の競泳距離は千住大橋より永代橋²⁰⁾までとす。

八、大選手競泳の優勝者五名を選び順次に依

りて純金大賞牌其他の賞品を贈与す可し。

明治四十一年八月 報知社²¹⁾

参加志望者は体格検査を受け、その合格者が予選競争に参加、大会当日の大選手を15人選抜することとした²²⁾。告示から大会まで二週間弱。その間に予選競争を実施するということであるから、準備に対しての十分な時間はなかったといえよう。それでも、報知社への申込は300人を超えた²³⁾。

なかでも、女性の参加者があったことは、この時代において驚くべきことではないだろうか。申込者の中「異彩を放てるは十九か二十歳と見受けられたる婦人にして、申込書には『大島産にて水泳なら二里や三里は何でもありません』と条件を附したる位とて、当日来りて検査を受くるを見るに容貌は兎も角、丈四尺九寸、斤量百五十斤、男にも勝りし骨格の立派さ、姓名を濱口タイと云ひ、荒くれ男子群衆の中へ来たり、^{いささか}些も臆れし風情もなく、元気よく立ち去りたり」²⁴⁾と体格検査にやってきた様子を記事にしている。

『報知新聞』紙上では、連日報知社に寄せられた大会への寄贈品を「水泳大競争会寄贈品」²⁵⁾と題して紙上で紹介し、これらを参加選手への賞品とすることを発表した。多数の寄贈品、賞品は、それだけで読者の興味を引きつけた²⁶⁾。また、「水泳大競争の景気」²⁷⁾「隅田川大競泳実験場の注意」²⁸⁾「体育奨励水泳大競争大選手賞品」²⁹⁾「競泳必勝の心得」³⁰⁾など、練習の仕方、水路の取り方、泳ぎ方などを解説した水泳大競争会に関連した記事を連日掲載した。そして、この大会の委員には、会長に海軍中将肝付兼行をはじめ司令部長に海軍少将新島一郎など、軍人、教員、日本泳法の水泳教師などをそろえ、大会の権威化を図った³¹⁾。

8月12日には「水泳術の前途」と題した論説を発表した。

夏季に於ける運動は水泳に若くものなく、年々之を試むる者の増加し行くは、国民の体育上並に実利上に於て大に賀すべき事なり。今回我社は之に鑑むる所ありて朝野名士の賛助を得て競泳会を計画したるに、之に参加せんと欲する者^{すにが}頗る多く、一般社会にも大なる注意を与へたるが如し、亦以て如何に此の技術が国民に重要視せられ、将来如何に発達

すべき運命を有するかを^{ぼくち}卜知し得べし。……吾人は今日に於て水泳術を教授する諸氏の奮^{こいねが}励を希ひ、好望を賭けて此の技術の前途を祝福せんと欲する者なり³²⁾。

連日の大会関連記事の掲載に加えて、このような論説を発表することで、水泳による国民の体育奨励を建前に、この大会の盛り上げを図ったのである。

『報知新聞』は予選競争、大選手競泳ともに、紙面を大幅に割いて報道した。

紅一点の参加者である濱口は予選競争において「当日の競泳中第一の呼物ともいふべき婦人選手濱口おたい（二十三）の加はる噂の伝はり居し為か、『女選手しつかりやれ』の声援非常に多き中を、肉色の猿股したる白一団が、^{しやしよく}赭色多き男子選手と出発点に入りし時は、此かよわき婦人選手に同情する声しばらく鳴りも止まず、人気を一身に集めたり」³³⁾というように観客の注目を集めた。濱口の泳力は、男性に劣らなかつたようだ。「規定の帽子を^{かむ}冠らず、庇髪に黒のリボンを付け、而も其リボンを濡らさず帰着せしには何れも驚嘆したり」³⁴⁾というように、濱口は、顔、頭を水上に出した立ち泳ぎのような泳法だったことが推察できる。

さて、濱口は予選競争で規定の成績をおさめることができなかった。しかし、「婦人の持久性と海国女性の大勇気とを發揮せしむるが為め」³⁵⁾との理由で濱口の大選手競泳参加が決定したのである。男性の中に紅一点の女性参加者は、新聞読者の興味を引くには十分だったであろう。

さらに、女性の参加は濱口のみにとどまらなかった。『報知新聞』は「遠距離水泳の妙手なる婦人三名明日大競泳に番外として加入したき由申し来り。本社はこの勇しき女性の競泳者を番外に迎へ、濱口たい女と競泳せしむることに決定せり。隅田川の一大壯観は此婦人連の加入に依て更らに一段の興味を添へ、当日の見物なるべし」³⁶⁾と伝え、大競泳前日に番外女性選手3人の追加を発表した。こうして男性の競泳の中に女性を参加させるだけでなく、女性の間での競泳という興味を付けくわえることになった。そして「海国男子を生む可き将来の賢母の競泳こそ十六日の競泳中目醒

ましきものの一つなりけれ」³⁷⁾というように、女性の競泳が一つの呼物になったのである。

8月16日午前10時、18人の大選手と4人の番外選手の22人が千住大橋の出発点から一斉にスタートした。隅田川の沿岸に集まった観客は30万人と報道されている³⁸⁾。選手には付添船がつき、選手の帽子と同じ色の旗がたてられた。これにより、沿岸からの観客も選手を見分けることができた。なかでも、予選競泳から参加した濱口は人気を集め、スタートから「『濱口たい応援隊』などと記せる旗を物々しく立てたる二三隻の応援船に囲まれて悠々と波押し分けてぞ進みける」³⁹⁾という様子だったという。

優勝者は腰山金雄。千住大橋—安宅町間を1時間27分で泳ぎ切った。隅田川沿岸に観客が集まっただけでなく、隅田川上にも観覧船が出、付添船や応援の舟に囲まれての競泳だったようだ。「接近する船の艀で五回も腹部を衝かれ痛く弱らされたのでした」⁴⁰⁾との選手の証言もあった。また、濱口も「汽船に側を通られた時には思はず波に煽られましたのと、水が油臭くて口に入ると悪く甘く感じ、塵埃などが咽喉に流れ寄るには常に気味が悪くてなりませんでした」⁴¹⁾と語っているように、隅田川の水質、船の往来など、競泳を行うには厳しい条件だったようである。

Ⅳ 海浜レジャーとメディア・スポーツ・イベント

1 メディア・スポーツ・イベントによる海事思想の啓蒙

『大毎』の「海上十湮競泳」は、その告知に見られるように海事思想の養成を第一の目的としていた。また『報知新聞』の「体育奨励水泳大競争会」は、その名の通り体育奨励を目的として掲げていた。さらに、この水泳大競争会について、大会会長の海軍中将肝付兼行は、賞品授与式にて以下のように演説した。

本日選賞に与りたる諸君は海国男子として敷島女子として世界に恥ぢざる大名誉を得たるなり。……吾人日本臣民の活動の場所と責任を措くの区域として陸に多きか將た又た水に多きか、其の領土^{はなは}の酷だしく英国に似て四

面回らすに海を以てせる我が日本に在りては、言ふまでもなく海の日本を以て任じ且つ期せざるべからず、陸上国の独逸国民尚海事思想云々と其の口に膾炙す、水上国たる我が日本国民たるもの豈に思はずして可ならんや……平生游泳を以て国民必修の一科と確認し常に其の実行を希望するや切なり……諸君平生の鍛錬に得たる斯の大名誉を祝し、之れと共に天晴游泳界の達人として国民を鼓舞奨励あらんことを望む……就^{なかんづく}中婦人の諸君に在りては深く諸君の未来の妻たり母たる天職に顧み、敷島女子の代表名誉者たる今回の光栄に対して一層の奮励あらんことを祈る⁴²⁾。

つまり、体育奨励を目的としているが、その内容は海事思想の養成だった。そして、この演説にあるように、海国日本の海事思想の重要性、水泳が国民必修の技術であること、水泳を国民に奨励すること、男性のみならず未来の妻であり母である女性にも水泳を奨励することが、この大会を契機に期待されたのである⁴³⁾。「海事思想」を広めることは、四周を海に囲まれ、対外戦争も経験した「海国日本」の重要な方針だった。

新聞は、部数の維持、拡大のために開催した水泳のメディア・スポーツ・イベントを通じて、国民に「海事思想」を啓発したのである。

2 海浜レジャーの創出

繰り返しになるが、大磯に本邦初の海水浴場が開設されたのは明治18(1885)年。以後横浜から鎌倉にかけて海水浴場が数多く建設され、明治10年代後半から明治20年代にかけて最初の海水浴ブームが起こった。もちろん「因幡の白うさぎ」の神話を出すまでもなく、海水が傷や病気の治療に役立つことは古くから広く知られていた。先にふれた「潮湯治」である。また、避暑とも密接な関係があった。

そして大阪湾岸に海水浴場が最初に現れたのは明治21(1888)年のことである。天保山に海浜院・海水温浴場が開業。堺の浜寺に浜寺海浜院、大浜に海水浴場が開設された⁴⁴⁾。これらは病気や傷の治療を主目的とした近代的健康施設であった。さらに、近隣に料理旅館などが作られ、新種の遊

興施設、温泉として認識されていた。

このように余暇の娯楽や保養として捉えられていた海水浴と水泳を結びつけたのは、明治20年代に入ってから軍国的風潮である。日本の対外戦略とあわせて四周を海に囲まれた「海国日本」の海防の必要性がひろまり、海事思想の養成が国民的課題とされた。たとえば「海水浴は身体を健康を保持するに効あるばかりでなくして、傍ら游泳の術を覚ゆる事が出来る。我が国は四面皆海を以て巡らして居る島国であるから、国防上海軍の必要があるに因て、海国男子であるもの能く游泳術を研究して、後日海軍々人になった時には直ちに其技術を利用する便があり、海軍々人養成の一助ともなるのである」⁴⁵⁾というように、水泳が海国男子として必要不可欠な技術としてとらえられ、海水浴は、健康の維持、増進に効果があるだけでなく、水泳を練習する機会として認識された⁴⁶⁾。この背景には日本が初めて経験した対外戦争である日清戦争とその後の日露戦争の影響があることはあきらかである。

そして、海水浴と水泳を結びつけた最初のメディア・イベントが『大毎』の「海上十湊競泳」だった。『大毎』は「この十マイル競泳は近來の快挙で、わが水泳の歴史に特記さるべきものである。学校その他に水泳が盛んになり、世界的水泳選手を輩出するに至つたのは、元より時運の然らしめるところであらうけれど、本社十マイル競泳がわが海国男子に刺激を与へ、水泳を盛ならしめるの動機となつたことは世人の認めるところ」⁴⁷⁾と、このイベントが水泳の普及に一役買ったことを自負している。

さらに明治39(1906)年、『大毎』は南海鉄道の協力のもと、水練場⁴⁸⁾を併設した浜寺海水浴場を開設した。勿論、前年の「海上十湊競泳」の成功がこの海水浴場開設の契機である⁴⁹⁾。つまり「海上十湊競泳」が「海で泳ぐ」という海水浴をひろめることになったのである。これより以後、『大毎』は浜寺で多くの事業を南海とタイアップして行うことになる⁵⁰⁾。事業を行うことで読者をイベントに動員するのは『大毎』の戦略であるし、南海鉄道は浜寺で事業を行うことで増収を見込むことができた。それに沿線のイメージアップにも

なった。こうして浜寺海水浴場は、水泳技術の修得の場であるだけでなく、余暇を過ごすレジャー空間として発展していくことになるのである。

このように「海上十湊競泳」は、大阪における海水浴と水練場が結び付いた海浜レジャーの創出の契機になったといつてよい。

いっぽう、隅田川では報知社主催の「水泳大競争会」以後、水泳のメディア・スポーツ・イベントは開催されていない。隅田川は「日露戦争前後から沿岸に工場が建てられ汚水が流れ出るようになったので、水泳場も次第に衰え」⁵¹⁾たといわれている。そして「水泳大競争会」の参加者の言葉にあるように、隅田川の水質は汚染され、水泳に不向きになったのである。

これ以後隅田川での水練は衰退し、横浜や大磯、千葉に開設された海水浴場が水練の場となったといつてよいだろう。

V むすび

もともと海水浴とは、温泉につかるように海につかることであった。海水浴と水泳を結びつけたのは明治20年代に入ってから「海国日本」の軍国的風潮である。

「海上十湊競泳」も「体育奨励水泳大競争会」も海事思想の養成を目的として紙面に掲げたイベントであった。これらイベントを通じ新聞の部数維持、販路の拡大が目指されたわけだが、それだけではなく、これらのイベントは「海で泳ぐ」海水浴のイメージをひろめる役割を果たした。「海上十湊競泳」を契機に海水浴場と現在も続く水練場が継続的に開設されたし、いっぽう「水泳大競争会」以後、水泳の場は隅田川から海水浴場に移動した。

このように、水泳のメディア・スポーツ・イベントは、海事思想の啓発、海水浴、水泳の三つをつなぐ(媒介する＝メディア)役割を果たしたのである。よってメディア・スポーツ・イベントは海水浴と水泳が結び付いた海浜レジャー創出の一つの契機となったといえるだろう。

本研究は2008年度東海大学体育学部研究教育補助金の助成を受けたものである。

註記および参考文献

- 1) 財団法人日本生産性本部：『レジャー白書 2009』，平成21年，p. 19.
- 2) 本稿では，浜辺で行う余暇の娯楽，遊びを海浜レジャーとする。
- 3) メディア・スポーツ・イベントとは，①メディアによって企画，演出されたスポーツ・イベント，②メディアに大規模に中継され，報道されるスポーツ・イベント，③メディアによってイベント化されたスポーツの事象をさす。吉見俊哉：「メディア・イベント概念の諸相」，津金澤聰廣編著：『近代日本のメディア・イベント』，同文館，1996年も参照されたい。
- 4) 小口千明：「日本における海水浴の受容と明治期の海水浴」，『人文地理』，第37巻第3号，人文地理学会，pp. 23-37，1985年。
- 5) 「海水浴」，『幼年雑誌』，第2巻第15号，明治25年8月。なお，本稿の引用文中の旧字は新字に改め，便宜上句読点を加えた。しかし原文のニュアンスを伝えるために旧字のまま引用した部分もある。
- 6) トク・ベルツ編 菅沼竜太郎訳：『ベルツの日記 第一部上』，岩波文庫，1951年，p. 62。（ ）内引用者註。
- 7) 「レジャー」という語が日本語として定着するのは1960年代高度経済成長期以降である。「レジャー Leisure」は「余暇」と訳され「仕事から解放されることが許された自分の自由になる時間」を意味する（蘭田碩哉：『余暇学への招待』，遊戯社，1999年）。明治期では「レジャー」という用語は使用されていなかったが，余暇の娯楽や遊び，保養は，現在の視点から捉えると明治期のレジャーとして理解できるであろう。
- 8) 木下秀明：『スポーツの近代日本史』，杏林書院，昭和45年，p. 29。
「水泳の歴史」，財団法人日本体育協会編：『スポーツ百年』，p. 205。
- 9) 木村 毅：『日本スポーツ文化史』，ベースボール・マガジン社，1978年，p. 170。
- 10) 佐々木隆：『日本の近代14 メディアと権力』，中央公論新社，1999年，pp. 129-130。
- 11) 小野秀雄：『日本新聞発達史』，大阪毎日新聞社 東京日日新聞社，1922年，p. 250。
- 12) 「海上十湊競泳」，『大阪毎日新聞』，明治38年7月25日，第1面。
- 13) 「肝付兼行氏の富国的慣海性の養成」，『少年世界』，第2巻第12号，明治29年6月，pp. 25-27。
- 14) 「今回の大競泳は選手その人の技倆よりも寧ろ事実上各流の争ひだから尚更面白いです」（『海上十湊競泳 瀬戸保三氏の談』，『大阪毎日新聞』，明治38年8月9日，第7面）。
- 15) 神戸の外国人ミューラー氏が申し込んだことをうけて「距離の長きに於て既に大競泳といふべく更に実質に於ても洋の東西を引くるんでその技を闘はすの大競泳とぞなんぬ」（『又又外人の申込』，『大阪毎日新聞』，明治38年8月9日，第7面）との記事が掲載された。ミューラー氏は実地試験に参加したが途中でリタイアし，選手には選抜されなかった。
- 16) のちに国際連盟事務局次長，IOC 委員，イタリア大使，フランス大使などを務めた。
- 17) 「海上十湊競泳 大競泳の成效」，『大阪毎日新聞』，明治38年8月22日，第7面。
- 18) 「東京法科大学生の加入」，『大阪毎日新聞』，明治38年8月11日，第9面。
杉村のいう水府流は水府流太田派である。水府流太田派の達人で，後に東京高等師範学校で水泳を教授した本田存が杉浦の付き添いを務めた。杉浦自身は水府流太田派を中心に諸派を統合した高師泳法といわれる泳法を習得していたと考えられる。現在では水府流水術と水府流太田派は別の流派として公認されている。
- 19) 「優勝選手の流名」，『大阪毎日新聞』，明治38年8月23日，第7面。
- 20) 大選手競泳は千住大橋から安宅町までの7 km弱の川下りに変更された（「体育奨励水泳大競争会」，『報知新聞』，明治41年8月9日，第3面）。
- 21) 「体育奨励水泳大競争会」，『報知新聞』，明治41年8月4日，第3面。
- 22) 実際には13日に予選競争を行い，大選手15人を選抜した。しかし予選競争の第五回で，スタートに不備があったため，翌14日に15人が予選競争をやり直した。その結果3人の大選手が追加，計18人が選抜された。なお，予選競争の距離は吾妻橋から安宅町（新大橋付近。当時の新大橋は現在より100mほど下流にあった）の3キロ弱だった。
- 23) 「興味あるべき本日の予選競争」，『報知新聞社』，明治41年8月13日，第7面。
- 24) 同上。
- 25) 『報知新聞』，明治41年8月6日，第4面，8月8日，第4面，8月9日，第4面，8月10日，第4面，8月11日，第4面，8月12日，第4面，8月13日，第4面，8月15日，第4面。
- 26) 「^{おも}重なる商品は何々です（欲張泳手）」「水泳の

- 曲芸では賞品は取れませんかな（名家聖）」（『報知新聞』，明治41年8月10日，第4面），「賞品は一着になると何々です（小慾生徒）」（『報知新聞』，明治41年8月12日，第4面）など賞品に関する投書が多数あったことは，競泳だけでなく，多数の賞品が魅力だったということである。これに対して「副賞は実際夥多で競泳者一般に漏れなく三四品は渡ります。夫故大選手第一着より第五着迄は沢山の品数です（記者）」（『報知新聞』，明治41年8月12日，第4面）と答えている。
- 27) 『報知新聞』，明治41年8月7日，第7面。
 - 28) 『報知新聞』，明治41年8月9日，第7面。
 - 29) 『報知新聞』，明治41年8月11日，第3面，8月12日，第2面。
 - 30) 『報知新聞』，明治41年8月13日，第4面。
 - 31) 「体育奨励水泳競泳会委員」，『報知新聞』，明治41年8月10日，第4面。
 - 32) 「水泳術の前途」，『報知新聞』，明治41年8月12日，第1面。
 - 33) 「水泳競争予選会 第四回競泳」，『報知新聞』，明治41年8月14日，第7面。
 - 34) 「婦人の競泳者」，『報知新聞』，明治41年8月14日，第7面。
 - 35) 「婦人競泳者の再泳」，『報知新聞』，明治41年8月15日，第4面。
 - 36) 「婦人競泳者増加」，『報知新聞』，明治41年8月16日，第4面。
 - 37) 「大水泳競争記」，『報知新聞』，明治41年8月17日，第4面。
 - 38) 同上。
 - 39) 同上。
 - 40) 同上。
 - 41) 同上。
 - 42) 「大水泳盛会記」，『報知新聞』，明治41年8月17日，第7面。
 - 43) この背景には，女性の体力，体位の向上を目指す思想があったといつてよい。つまり，女性は丈夫な国民を生む存在であるという考え方である。
 - 44) 橋爪紳也：『海遊都市』，白地社，1992年。
 - 45) 花田信雄：「海水浴」，『少年世界』，第11巻第8号，明治38年6月。
 - 46) 夏目漱石『こころ』（大正3（1914）年『朝日新聞』に連載）には，明治末の情景が描写されている。この作品の冒頭は鎌倉に避暑に来た「私」が海水浴場で「先生」と泳ぐ場面である。よって当時「海水浴」と「水泳」が結び付き，レジャー（余暇の娯楽，避暑）となっていたことがうかがえる。
 - 47) 大阪毎日新聞社編：『大阪毎日新聞五十年』，大阪毎日新聞社，1932年，p. 186。
 - 48) この浜寺の水練場は大正11（1922）年に浜寺水練学校と改称し，現在も毎日新聞大阪本社事業として継続している。
 - 49) 「本社は翌三十九年六月に浜寺海水浴場を開き，水練学校等を設け，海事思想を鼓吹し，自来二十五年，逐年盛大に赴きつつあるが，その起源を遡ればこの十マイル競泳に跡づけられるのである」（大阪毎日新聞社編：『大阪毎日新聞五十年』，pp. 186-187）
 - 50) 関西中等学校連合庭球大会や活動写真大会，学生相撲大会，飛行船の飛揚など。
 - 51) 川本信正：「明治・大正のスポーツ（写真）」，財団法人日本体育協会編：『日本スポーツ百年』，昭和45年。